
trans the story (仮)

瀬能 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t r a n s t h e s t o r y （仮）

【Nコード】

N 6 5 3 9 X

【作者名】

瀬能 遼

【あらすじ】

世界大戦を止めたのは巨大隕石だった！？地球の環境が激変し生きていくことが出来なくなった世界で主人公たちは巨大隕石で作ったスパコンの中にひきこもることになった

プロローグ

結局、人は自らの手で戦争を止めることはできなかった。

世界大戦

それを止めたのは隕石の落下による環境の破壊だった

その時の地球の人口約6億人、そのうち9割以上は宇宙へと旅立った
そして残った僕らは・・・

徹底的にひきこもる事になった

『転生システム』

とあるバカ共（もしくは天才共）が作ったMMORPGによく似た
システムで、落下した隕石を元にした材質でできた破壊不能の超大
規模スーパーコンピュータである。

現代兵器で落下前に迎撃しても傷一つ負わなかった物を加工して高
機能AIをインストール、さらに世界を構築しバカ共は脳をフルス
キャン（この時、脳は破壊した）さつさと世界内に逃避していた。
システム

AIによる絶対干渉防御でシステムに対するアクセスは一切不可能
（『転生システム』は除く）、一応兵器による攻撃はしてみたが破

壊不能でもちろん傷一つつかない。（軽く星を破壊できる分撃ってたんだけどな）

宇宙に旅立った奴らに物資や食料はほとんど持ってたし、すでに地球は住める環境ではないしで途方に暮れていた。

地球に残った（残らされた）人類は9割以上がお年寄りで、多数は若返るかもしれないと喜んでいて、少数、というか俺は

「せつかく高性能のスパコンを作ったんなら地球で生きるための計算をしるよ（泣）」

と説教と愚痴を吐き出すために転生システムを受け入れることになった。

だって仕方ないだろう？

これを作ったバカ共は俺の家族なんだから・・・

うちの家庭は父、母、姉、俺、双子の妹の6人家族だ。

父 一之瀬恭吾（50） 母 一之瀬秋菜（48）はもともと研究者で頭にマッドがつくが優秀だったらしい。ほとんど家にいなかった。なので何の研究をしたのかは知らない。

姉 一之瀬冬香（23）は天然で美人だが家事が一切ダメだった（台所が一度吹飛んだこともあったため家事の一切は全部俺がやっていた）

そのせいか、家ではよく勉強していてシステム関連の分野では天才と呼ばれていた、間違いなくあのAIを作ったのは冬姉だろう。

妹たち一之瀬空（16）と一之瀬海（16）は末っ子でかわいがられていたので保護という意味で一緒に連れてかれたんだと思う。

俺でもまず最初に連れていくな、家では面倒見えて懐かっていたし（冬姉もだが）二人ともかわいいしな（兄バカですがなにか？）

とまあこれが俺、一之瀬晴夏（18）の家族構成だ……。なぜハブられたんだろう俺、とりあえずひざを折って手のひらを地面につけてもわからないので、心のダメージをおして新天地へ旅立つことにした。

転生システム起動後、俺は一面真っ暗な部屋で佇んでいた……。15分ぐらいたったと思う、突然顔にスポットライトが当たる。

「なんだなんだ取調べかつ、いつたい俺が何をした」

と言ってみたが返事がないただのさびしい一人遊びのようだ。

頬が濡れてるきがする。こうやって人は大人になっていくんだなと黄昏ていると空間に響くように女性の抑揚のない声で話しかけられた。

「はじめまして、AIのアイと申します。一之瀬晴夏様ですね？」

「はい、そうです。その名前はつつこんだほうがいいの」では、ご家族からのメッセージをお伝えします」か？」

「へ？」

「晴夏よ 頑張つて生きるのじゃぞ」・・・以上です」

「はあああああん 意味わかるかああああああ 誰視点で何様だよクソオヤジイイイイイイイ」

つい叫んでしまった

ちなみに声はちゃんと親父の声だった

親が変態なのは知っていたがここまでとは思わなかった、むしろこの年まで知らなかったから一生知りたくなかった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「冗談です」

ネテイイ？むしろナイテイイ？

「人の名前に難癖つけるからです」

「心読まれた！」

「その貧相な顔に書いてありますが？」

「ごめんなさい俺が悪かったからこれ以上心を折りに来ないで！」
土下座して言ってみた

「ではシステムの説明をさせていただきます」

さすが冬姉の作ったAIシステム、すごい性格だ。

この世界の名前はオリアスといって、使用言語はコモン語と呼ばれ統一された言語を使用しているらしい、赤子からスタートするので日常会話は可能になるだろうし、勉強すれば読み書きもできるだろうとのこと。

ステータスは2つのみ身体能力と魔力だけでこれが上昇すればHPとMPも上昇、覚えられるスキルも増える、スキルは10000種類以上あるが1人につき最大10個までしか習得できないし、人によつては1個しか習得できないらしい。

それらは108問の質疑応答でこの場で最大いくつ習得できるか決まり、この質疑応答で適性を見て何らかの『才能』も得られるとのこと。

前世の記憶を引き継げるかどうかもこれで適性を見るらしい。

詳しいことはオリアスで自分で調べること、そして最後にちゃんと親からのメッセージを教えてくれた。

「ああ・・・父さんです・・・私と母さんは前世の記憶を引き継げないことになったので、死んだと思ってくれて構わい・・・冬香と海と空とお前がどうなるかはわからないが、お前たちには幾つかの特別なスキルとアビリティを付加してある・・・父親として殆ど構ってやれなかったがお前たちのことを愛しているよ・・・」

「えええ・・お母さんです。大体のことはお父さんに言われちゃったんだけどね。貴方たちには1人ずつにサポートAIを付けていて、目の届く範囲にいればお互いのことを教えてくれるわ。・・幸せになる努力を怠らないように、人に迷惑かけないように、NPCも生きていくからね。・・・貴方たちは私たちにとって何時までも宝物です。」

「うっく…うっく…うっく」

久しぶりに思いっきり泣いてしまった。ぐちゃぐちゃしていた。

何で生きているときに言うてくれなかつたんだと怒りたい気持ちもあるし、単純にとても．．．とても悲しかった。

……少したってようやく少し落ち着いた

「シリアスとかガラじゃないと思っていただけだなあ……」

自嘲ぎみに小さく呟いてみる

「大丈夫ですか？」

アイが聞いてくる

「ああ、話を進められる程度には落ち着いていた」

「では、改めて自己紹介を、私は貴方のサポートAIのアイと申し

ます」

といって暗闇から姿を現した

彼女？の姿は身長150？位でスレンダーな体つき、髪は肩までの長さで黒髪、顔つきは可愛いし目は綺麗な翠色で、簡素な黒いワンピースを着けていた。というか重用なのは頭に生えた猫耳とおしり付近の尻尾だと思う。

手を伸ばしてみる

ついつと尻尾が逃げる

手を伸ばしてみる

ヒョイッと猫耳が避ける

「触っていい？」

「嫌です」

「触らせてください」

「死ねです」

「……………この世に癒しは無いのだろうか……………」

とりあえず俺はこうしてオリアスで生きることになった

プロローグ（後書き）

基本的にクレーム大募集です

何かのパクリだという指摘と誤字脱字がありましたら教えてください
よろしくお願いします

生まれた？

「う・うん・・・」

どうやら目が覚めたようだ

体を起こしてあたりを見渡してみる

窓がない部屋？で近くにアイが立っていた。

「あれ・・・赤子からスタートって言ってなかったっけ。ここは・・・何処だ？」

「・・・・・・・・・・」

「アイ」

「・・・・・・・・・・」

「アイさーん」

「・・・・・・・・・・」

「アイさあまぁん」

「死ねです」

「答えてくれたとくれたと思ったらすごい暴言きた！」

「デレる日は来るのでしょうか？」

「自分で言った！ってか来ないと何時か死ねる！凶器は暴言、死因は心のダメージで！」

「それは史上初の快拳ですね。さすがは私のご主人様です」

「ぼ、棒読みで言われても、う、うれ・うれしくなんて無いんだからね！」

ツンデレ風に言ってみた

「そう来るとは思いませんでした！？」

アイはビックリして、じりじりと警戒しながら距離を離していった。行動で表されるのも結構傷つくことを学んだ・・・

「で、ここは何処で俺に何をして欲しいんだ？」

話が進めるため自分から切り出してみた

「コホン・・・ここは黒の部屋と呼ばれハル力を主として機能する部屋です」

「呼び捨てなんだ？」

「ここは黒の部屋と呼ばれ目の前のクズが残念主として機能する部屋です」

「ごめんなさい俺が悪かったです」

「では、話を進めます」

うん、力関係は俺の方が下とメモメモ

「まず、私に触れて「ステータス」と頭で念じてください」

と手を伸ばしてくる

素直に手をとって「ステータス」と念じてみた（耳か尻尾に手を伸ばそうかとも思ったが後が怖いので自重した）

すると目の前に28インチほどの立体ディスプレイが現れた

「これは、ハルカの個人情報を書かれています。人に見せたい場合は見せたい人に触れて念じればその人に見せることができ、もう一度念じれば画面は消えます」

「ああ、分かった」

アイにうなずいて続きを促す

「これは、日本語で書かれていますので身分証明等には使えないと思ってください。」

「なんで日本語なんだ？」

「これでしか操作できない事と、人に見せたらまずい情報が書かれ

ています。

人種とアビリティを見てください」

人種 『神人』

アビリティ 『不老』 『上昇制限なし』

「これは？」

「まず、『神人』ですがこれはハルカとハルカの姉妹のみしか存在しません。見た目は人間ですが、身体のスペックはどの生き物にも当てはまらないくらい高性能です」

「え？」

「そしてアビリティ『不老』は寿命で死ぬことはありません、食事をとらないと骨だけになって生きる事が可能ですが、魔物として討伐されると思いますのでちゃんと食事することをお勧めします。『上昇制限なし』はステータスの上昇、スキルの上昇制限がありません。普通は一定のLVで成長は止まります。」

「えーと？」

「つまり、生きている限り成長し続けることができる能力です」

「なるほど、質問いいか？」

「どうぞ」

「『不老不死』じゃなくてなんで『不老』なんだ？」

「長い時間の中で人の精神が耐えられるかどうかわかりませんし、『不死』だと死んでもいいや、と思って必死に生きないと思うからそうです。」

【これはゲームでは無く生きていくために創った新しい世界だ】とハルカのお父様が仰っていました」

「じゃあ何で魔法とかあるんだ？」

「さあ？遊び心か何かじゃないですか」

「知らないのか？」

「知りませんが何か？」

文句あんのか？って感じで睨まれた

「いや、別に」

フツ俺だって学んでいるんだぜ

ゲシツツバキツガンツ

脛をけられてしゃがんだところに顔面に膝蹴り後ろに倒れた所に頭を踏まれた

流れるような三連コンボだった

「なや・・・にあんで（泣）」

「ドヤ顔がム力つきました」

と言って足を顔から放して腹にまたがって座るアイ

羨ましいか野郎共

両手は足で抑えられていて不用意な発言するとグーが顔に飛んでき
そうだが羨ましいか野郎共（泣）

「ふう、では続けます。次はスキルを開いてみてください、頭で思
い浮かべるだけでステータス画面は操作可能です」

アイはいい仕事したあとというように汗を拭く動作をしたあと説明を
続けてきた。

怖いのですぐ操作する俺

プライド？何それ？食べられるの？

スキルを開くとパツと目で数えきれないスキルがあるのが確認できた

「何これ？」

「スキルです」

「いや、詳しい説明をお教えくださいアイ様」

プライド？何それ？食べられるの？

大事なことは二回と言わず何回も思い返さないとな

「この世界にある全種類のスキルです」

「ふーん？」

ムンズツ

「・・・・・・・・」

「えっえーと・・・な、なんで不満気なんでしょうか？」

「いえ、別に・・・」

じゃあ胸倉つかんで冷たい目で睨むのやめてほしい！！

一応、顔は可愛いから俺がマゾだったら大喜びだよ！！！！

はっ まさかマゾに調教中！！？

「何か失礼なことを考えていませんか？」

ジロツ

さらに目を細めて睨んできた

「めめめめ、滅相ありません」

「何故でもったんでしょうか？」

目を細めたまま笑って今度は襟首を締めてくる

「顔が近いっ、可愛い顔のアップが恥ずかしい!!」

と怒鳴ったら手を放してくれた。

俺はこの時、危機を脱して安堵していたのでアイが頬を染めて俯いているのに気づかなかった。

「では、続きを始めます。この場所とはあるダンジョンの最深部でここにたどり着いた者の願いをなんでも1つ叶えるという仕事をし
て欲しいんです」

「えっ俺は此处にひきこもってないといけないの？」

「この場所にたどり着けば私が感知できるので外出は可能です」

「それってアイは基本留守番ってガフッ」

顔じゃなくて腹を殴られた

「嬉しそうですね？」

笑顔が怖い！目が笑ってない！実はヤンデレなのか!!？

「いやいや、それはそれは残念で堪りませんよ!？」

と自分でも顔が引き攣っていると分かりながら言う

「それはよかったですね、私もついて行きますから」

・・・アイはニコニコして言った

まあ見ての通りと言うか肌で感じたとおりと言うか、今のところ俺より強いっぱいし別にいいかと前向きに考えることで自分を納得させた。

危なくなったら盾にして逃げようと思ったのは内緒だ

「で、なんでそんな仕事・・・いやっ・仕組み？があるんだ？」

「人は希望があつた方が強く生きられます。此処にたどり着けるほどの強い思いと実力を兼ねそろえた人なら願いを叶えても問題ないでしょう？」

・・・一応、願いを叶えるかどうかはハルカの裁量に任せます。後はさつき言つた『不老』と同じ理由です、長い時間の中でハルカが精神が耐えられるかどうかわかりませんが、もし此処にたどり着いた人にハルカの後継者になれる器があれば、引き継いで貰いたいと思っています。」

「あれ、じゃあ俺は自分の願いは叶え放題なのか？」

「いえ、入口から此処まで来れたら構いませんが・・・何か不満でもありますか？」

「そっぴや特に不満は無いか？・・・今のところは」

「願いを叶える条件は 入口から此処にたどり着くこと のみです

が願いを叶えることができるのはこの部屋でないと無理です。

あと、たとえば死人を生き返らせることも可能ではありますが、天寿を全うして死んだ場合は生き返った途端またすぐに死んでしまいます。

このシステムは言うなれば『万能』であって決して『全能』ではありません。ハルカはシステム管理者ですし、過信しない方がいいと忠告しておきます」

「確かになんでも願いが叶えば人は墮落する・・・か、使用は控えた方が良さそうだな」

真面目に説明してくれたアイに苦笑しながら返事を返した

「一応聞くがこのダンジョンって何階あるんだ？」

「地下1000階、地上から2800メートル程下です」

「はい？・・・それ、辿り着いた奴いるの？」

「私たちが今いますね」

「俺たち以外で」

「いませんよ」

即答された。

「・・・そうか」

ドラゴン。ール集めるのとどっちが大変なのか判断できんな。

とりあえずこの部屋は好きに使っていいとのこと

そこそこ広いし倉庫として使うか？

まず、アイに退いていただいてスキルの設定をすることにした

スキルは大きく分けて生産系、身体系、魔法系、搾取系、特殊系に分類される

最大10個までしかセットできないところは同じらしい

1万種類ってありすぎだよなあ悩むなあ

「なあアイ、お勧めのスキルとかあるか？」

「でしたら1つお願いがあるのですが」

「ん、何？」

「生産系のスキルで『軽鎧生成』と『刀鍛冶』で私の装備を作ってほしいのです」

「ああ、分かった・・・ん、この『軽鎧生成』と『防具生成』、『刀鍛冶』と『武器生成』って何が違うんだ？

それにも似たようなものが幾つかあるが？」

「身体能力と魔力を上げていくと覚えられるスキルが増えるという

のは覚えてますか？」

「ああ、そついや言つてたな」

「つまり普通は最初に『防具生成』を覚えた後にL.Vを上げて『軽鎧生成』や『重鎧生成』など専門に特化した上位スキルになっていくのですが、ハルカは『防具生成』をすつ飛ばしてすぐに専門の上位スキルを覚えることが可能です。」

「うーん？」

「要するに経験も積まず、勉強もせずに資格ゲットみたいなことです」

「なるほど、すごいインチキだ」

アイの喩えは分かりやすいな。

「ちなみに、材料を用意してスキルを発動、簡略された作業をこなして完成となります。」

刀など素人が実際に作業して作るとなれば何年かかるかわかりませんでしょう？」

「確かに、でもそれなら材料集めからか・・・だったら先に村か町に行つて働き口を探すのと情報収集した方がよくないか？」

あと、此処から地上まで出るのつてまさかとは思うが、一階ずつ上らないといけないのか？」

「働き口はギルドに登録してそこから仕事を受けた方が情報収集もできてお得ですね。」

地上までは、この部屋から転移することが可能です。逆に私が側にいればいつでもこの部屋に転移可能です。」

「へえ、ギルドってゲームとかでよく聞くあのギルド？」

「そのギルドでおそらく間違いないでしょう。詳しいことはギルドに直接お尋ね下さい」

「それもそうだな。ならこの部屋は宿と・・・工房として使用するか」

「そうですね、生活用品やトイレとお風呂にキッチンといろいろ揃えるのは楽しそうですし」

「ははは、まるで新婚さんみたいバハッ・グッ・ガッッッ・・・」

殴られた

今回は見事な顔面3連撃でした

「照れ隠しですが何か？」

薄れゆく意識の中で俺の耳にそう聞こえたのは気のせいだったのだろうか？

外へ

「う・うん・・・」

目が覚めたようだ

？・・・見覚えのない天井だな・・・

「ああそうか」

そついや転生したなーと思いながら体を起こす

床で寝るとこんなに体が硬くなるんだな・・・まずはベットから手に入れるか？と考えて、体をほぐしながら周りを見る・・・？

「そつといえばアイの姿が見えないな？」

「呼びましたか？」

「うわぁっっ」

思わず後ろに飛び退く

「思った通りハルカは小心者ですね」

と言いながらアイは床に着地する

「突然真上から逆さに出て来られたら誰だって驚くわ！？
て言っかどうやったらそんなところから出て来れるんだよ！！！」

天井を見ても掴まる様な所は無いし、そもそも起きた時天井に違和感は無かったはず？

「サポートAIの特殊スキルの一つです」

「そんなスキルあるの！！？」

「ソレは措いといて」

ジェスチャー付きで言われた

「措いとくの！？」

「朝食は要らないんですね？」

「要りますけれども！？」

「ではどうぞ」

生のネズミを渡された

「うをおっ」

つい放り捨てた

「食べ物を粗末にするなと教わらなかったんですか？」

ネズミをキャッチしながらアイが言う

「いやいやいやいやいや、ソレは食べ物とは言わないし!?!」

というかアイは猫耳生えてるしそういうのが主食なのか!?!?

俺が戦慄に震えていると

「まあ私も食べませんが」

ぼそつと呟きやがった

「をおい!?!?」

アイといると突っ込みスキルが上がりそうだ・・・そんなスキル無いけど・・・

「ではハルカで遊んだことですし朝食とギルドへの登録をしに行きましょうか」

「そこはせめて『ハルカと』って言うてほしいところなんだが・・・はあ・・・」

そのうち胃に穴が開いたりしないだろうな・・・ムリか、この体高性能らしいし・・・はあ・・・

「ちょっと待ってくれ、確か昨日は結局スキル設定してないから」

「仕方ありませんね5分で終わらせてください」

「この女^{アマア}」

「何か？」

ジロツ

「いえ、早く終わらせます」

俺弱いなあ、というかアイさん怖いっす

昨日は気づかなかったがスキルには意識して使用するマニュアルタイプと無意識でも効果があるオートタイプがあるようだ

とりあえず身体系から目についた『徒手格闘』『寸勁』『化勁』『感知』『打撃耐性』『打撃無効』をセツトした

後半はもちろんアイへの対策だ

プライド？もちろん有るけど（泣）イノチダイジニ（泣）

「では行きましょうか」

アイに手を取られた

と思った瞬間、景色が変わった

「へえ、これが地上かあやっぱ空気がうまいなあ」

と言いながら辺りをキョロキョロしてみる

どうやら此処は森の中らしい、空を見上げると太陽は1つ、反対側に薄っすらと月？が2つ見える。

「田舎者みたいで見苦しいです。王都に着いてもその様子でしたらそのまま捨てて行きますよ?」

「ああ、分かったけど・・・アイってサポートAIだよな?・・・」

「それが何か?」

心底不思議そうな顔をされた

「うん、いや、まあいいや」

「????、では、行きましょう。此処から南に4000?進んだところに王都があります」

「は?」

「ですから、此処から南に4000?進んだところに王都があります」

「は?」

吃驚が大きすぎて呆けてしまった・・・

「ハルカ?」

目の前でアイが手を振っている

「手を振ったことですし、置いて行きましょうか？」

「はっ、それは困る」

「現実に戻ってきたようですね、では、行きましょうか」

「ちょっと待て、歩いていく気か!？」

「何か問題でも？」

「大アリだ！それだと何時着くか分かったもんじゃない！」

「他に何かいい方法でも？」

「えーと・・少し待て、今、使えそうなスキル探すから」

と言ってすぐに『ステータス』を開いて目を走らせる

えーと、使えそうなのは魔法系の『転移魔法』『飛行魔法』特殊系から『MP自動回復』を併用すれば良いか？

スキルをセツと

「とりあえずやってみるか」

と言ってアイを引き寄せお姫様抱っこする

「ふえ、ひゃ、うえっ?!？」

アイがなんか言ってるが今は無視して集中『飛行』で真上に上昇
太陽の位置から考えて南の方を見据えて、近くの山の山頂付近に『
転移』した

MP残量を『ステータス』で見るとあと一回いけそうなので、もう
一度繰り返して『飛行』で地面に降りて、アイを下した

「ななななにゃに、何をするんですか！！？」

顔というか肌に見える場所全部が真っ赤になってるアイに怒鳴られた

「何って王都まで移動？」

「そうじゃなくて、いえ、そうなんですけど」

アイが狼狽えるの初めて見た

「まあ、とりあえず落ち着け、深呼吸だ」

すーはーすーはーすーはーすーはーすーはーすーはー

「落ち着きました。では遠慮なく」

ドンッ

殴られた

「フツ甘いな、今の俺に打撃は通じないぜ」

ドヤ顔で言った

「（怒）・・・・・・・・」

ガンッ

男の急所を膝で蹴られた

「ぎゃあああああああああああああ」

急所は打撃が効くのか！？何故だ！！？

「うおふ、くつ、つつ」

飛び跳ねてなんとか耐える努力をする

「まだまだ甘いですね・・・ふう・・・」

では、私もスッキリしたので具体的な説明をお願いします」

「・・・鬼か・・・つつつまジで・・・痛い・・・、使い・物に・・・
ならなく・なっ・・・たら・どうして・くれる？」

「その時は私の好きにさせて下さい？」

ニコニコ顔で言いやがった

何するつもりだこの女マジ怖い

・・・・・・・・

しばらくして何とか回復したのでちゃんと説明する事になった

「えーと、『転移』は行ったことのない場所には行けないけど、目の届く範囲内には『転移』可能だから、真上に『飛行』で上昇して目についた遠方に『転移』を繰り返して王都に行こうって話？」

「・・・確かに有効な手段ですね、地形に思いますますが先ほどの一回で300？ほどダンジョンから離れています。この調子で行けば昼頃には王都に着けそうです」

「『MP自動回復』が少し遅いけどなあ、見た感じ8秒に1しか回復しないな」

『ステータス』でMPを確認しながらばやいてみる

「使い続けてれば徐々に成長すると思いますよ、通常は3秒に10回復が最大ですが、ハルカは1秒で100回復とか以上にもなれるわけです」

「そついやスキルも成長するんだったな、MP回復まで時間かかるスキルセツトしなおしてもいいか？」

『ステータス』を開いてアイの返事も待たずに操作に移る

「・・・5分くらいしてやっぱ色々あるなあ、と思って見ていると一回で行く方法を見つけてしまった

特殊系スキル『千里眼』、遠方を見通すことができるスキルだ

スキルを発動して南の方を見ると20〜30km規模の城壁が

見えた

多分これが王都だろう

南を向いたまま今度はアイを抱き寄せて城門が見える位置に『転移する』

「よし、成功だな」

辺りを見渡して確認していると

「先程のことは懲りていないようですね？」

ジロツ

抱き寄せたままのアイが、真っ赤になって上目づかいで睨んでくる

「ふむ……可愛い可愛い」

頬をひきつらせつつ、頭を撫でてついでに猫耳も触ってみる

「ふえつつつつ、ふうにゆゝっ」

ボンツと音がしそうな感じでアイはさらに赤くなったと思ったら……
……気絶した

これは普通に可愛かった

「なるほど、次からもこうすればいいのか？」

アイを支えながら首を傾げてみる

後々、この対応が自分の首を絞めることに全く気付いていなかった

少し待ってもアイの目が覚める様子がないので、アイを背負って王都に入ってみることにした

7、8人城門に並んでいたので最後尾に並ぶ

並んでいる人には角が生えてる人や羽が生えてる人、犬顔の人もいた

初対面で失礼にならないよう、いろいろな人種が在ることを心に留めておく

順番が近づくにつれ、門番とのやり取りが見えてくる

どうやらカードを見せて通行する人とお金を払って通行する人がいるようだ

『ステータス』を見て確認をすると金貨3枚所持している

ポケットを探るとちょうど3枚あったので手に握っておく

後でお金の価値も調べないといけないなあと思いながら順番を待つ

……15分経って順番が回ってきた

目が合うと頭に角の生えた厳つい顔の門番が怪訝な顔をしながら聞

いてきた

「出身地とこの町での目的は何だ？」

「えーと、二人とも出身地は森で自給自足してたのでわかりません。この町での目的はギルド登録です」

出身地が分からないので嘘と本当の事を織り交ぜて答えることにした

「は？」

何言っただこいつ？みたいな目で見られた

「何か問題でも？」

少しカチンときたので強気に言ってみた

「いや、失礼した。お連れさんも含めて通行料は銀貨4枚になるが？」

金払えるのか？みたいな顔をしたので

「じゃあこれで」

と金貨を1枚渡すと

「なっつ！！？」

オーバーなりアクションを返された

こついうのは割と気分がいいね

お釣りとして半金貨1枚と銀貨46枚を貰った

どうやら金貨1枚で銀貨100枚、半金貨があるなら半銀貨もあるかな？

ポケットに入らないので銀貨は袋に入れてもらった

その時に聞いたがどうやら恰好がまずかつたらしい

俺自身、村人Aで通じそうな服装でアイもワンピースのみ

キャンプ道具もなしで此処まで来て、森で自給自足は不審だそうだ
というかこれで4000？遠くから徒歩で来ようとしてたとか大分
馬鹿げてるな

念のため、元々旅人で根無し草、山賊にあつて荷物を捨て命からが
ら逃げてきて、その時に気を失ったアイを医者に診せる事にして無
事通行できた

「あれ？俺コモン語喋ってた？」

城門を抜けて少しして疑問に思う

「あれ？コモン語読める？」

町に入って近くの看板を見てまた疑問に思う

「それはハルカの脳に直接コモン語をブチ込みましたから書く事も出来る筈です」

答えはアイから返ってきた

「お、目が覚めたか？・・・というか起き抜けに怖いこと言われた！？」

「必要な処置です」

「まあ、それはそうかもしれないが納得できるかは別だと思うんだけどな？」

「それよりも、私のこの気持ちを全部ハルカにぶつけようと思いましたがよろしいですね？」

「字面だけ見ればとても魅力的な響きだな、はは・・・ははは・・・は？」

この後の何が遭ったかは言いたくない・・・

外へ（後書き）

冒険モノ書くつもりがラブコメになっていったる気がする・・・
困った・・・

ギルドへ（前書き）

忙しくなってきたので投稿が不定期になります
あと文字数が少なくなってしまうそうです

ギルドへ

「う・うん・・・はっ」

目が覚めた

目の前にアイの顔がある、目があった

目をもう一度閉じて5秒数えて目を開ける

靴底が見える

「ふがつ！」

踏まれた

「目が覚めたら早く起きてください」

「で、では、足をお退けく、下さら、られてもよ、よろしいでひよ、しょうか？」

恐怖で言葉がおかしくなった

「・・・少し、やり過ぎました・・・申しわけありません・・・」

「・・・うん、とりあえず足を退けてから言ってほしい」

今度はなんとか落ち着いて返せた

「……今回は本当に反省しているんです」

「うん、だから、足を退けてから言っしてほしい」

「あと1撃で、……足の小指を角にぶつけただけでHPが0になつて、ハルカが死んでしまうところでした」

「喻えがひどくないそれ！！あと、足を退けてから言っしてほしい！」

「心配は要りませんHPは回復させました、少し体は痛むと思いますがもう少し休めば問題ない筈です」

「……足を退かす気ありますか？（泣）」

「……」

足を退かしてくれた

とりあえず立つて服についた汚れを簡単に落とす

パッパッパッのパツと

「……あの」

「ん、何？」

「……き、気に入ったん、でしたら、たまに、は、撫でられ、て、あげても、いい、です、よ？」

顔を真っ赤にして俯いて、猫耳をぴこぴこさせて尻尾が落ち着かない様子で左右に揺れているアイ？が言ってきた

「！！っ誰だお前！！？ガハッ！」

袂りこむように鳩尾を殴られた

この感じは間違いなくアイだと分かる、だが同時に殴られてアイ本人だと分かってしまう自分はもう人として駄目なのではないか？とも思う

「ゲホッゲホッゲホッケホッケホッ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アイが顔を赤くしながら冷たい目で見ている、器用だな

「ケホッケホッケホッケホッケホッツツツフー」

「・・・・・・・・・・それで、どうなんですか？」

赤い顔でそっぽを向いてアイが言う

「・・・・・・・・ああ、分かったよ」

その姿に小さく微笑みながらそう答えた

「ではまず、食事を摂るのが先です」

と言って俺の腕を引っ張って歩き出す

ちなみに今いる場所は路地裏だったりするボコられる前にアイに引き摺り込まれた

引っ張られる腕を見える

「……これがデレたという事ならボコボコにされてデレたからボコデレって言わないか？聞いた事ないけど

と考えていると大通りに出た

「へえ、すごい賑わってるな」

大通りは広い道幅で人が大勢いた、両サイドは店や住宅があつて、中央には露店がたくさん並んでいた

「見物は後にして下さい食事が先です」

「あ、ああ、分かった」

「朝に着いたのにハルカのせいでもう昼前です」

「えーと、ごめんなさい？」

「では食事はハルカのおごりということでは」

「まあいいけど」

俺は周りを見渡しながら適当に返す

「・・・・・・・・ではこの店に入りましょう」

と言って近くの店に放り込まれた

「フゴツ」

顔から床に着地した

「・・・・・・・・一応聞こうか、何で？」

後から入ってきたアイに倒れたまま聞く

「私だけ浮かれてるのがっ、じゃなくて、ハルカが構ってっ、じゃなくて・・・・・・・・ええ・と、そうですっ、ハルカのリアクションが薄いので活を入れようとしたんです」

「そんな先輩芸人が後輩芸人をダメだしするみたいな理由で放り込まれたの!!!？」

「そうです、その調子です。

ですがその突っ込みは甘いです、この世界でその突っ込みが通じるのは前世の記憶を持っている人たちくらいです」

うれしそうな顔でさらにダメだしされた

「お客さん、痴話喧嘩なら外でやっておくれよ？」

人間のオバちゃん店員がカウンターからこちらを軽く睨みながら注意してきた

「いえ、申しわけありません。このお店のお勧めランチを2つお願いします」

アイがさつさとカウンターに座ったので俺も起きて後に続く

「はぁ・・・厄日だ」

外に出て初日から、と思いながらため息を吐く

「食事を摂れば少しは気分も良くなると思います」

『それはアイが言っていていいことじゃないと思う』

と言いたかったが後が怖いので思うだけにする

45分くらいで食事を終えてギルドに向かうことになった

ちなみにお勧めランチはBLTサンドだった、甘辛ソースが絶妙でとてもうまかった

迷子にならないようにという名目でアイと手をつないで歩く

他の通行人からやたらと注目を浴びている気がするのを無視してアイに話しかける

「なぁ、アイ」

「何ですか？」

「道知ってるのか？」

「いいえ？ただ大通りをまっすぐ歩いていて見えてくる1番大きい建物がギルドらしいです」

「へえ・・・それってさっきから視界に入っているけど、まだまだ遠いあれかな？」

「たぶんそうだと思いますよ。」

着けば分かるんですから黙って歩いてください」

「了解」

・・・着いたのはおよそ30分後だった（目についた露店を冷やかしながら）

「・・・結構遠かったな」

「そうですね」

「・・・大きいな」

「そうですね」

東。ドーム位？の大きさだった

とりあえず中に入ってみる、少し奥に進むと受付の窓口がたくさん

横に並んでいる。

「なんか市役所みたいだな」

「基本、ギルドはなんでも屋です、冒険科や商業科などいろいろ詰まっていますからあなたが間違ってもないです」

「へえ、じゃあ空いてる窓口で聞いてみるか？」

と言って歩き出す

結局ここでも5分くらい歩いてようやく空いている窓口を見つけた

「すみません」

「はい、ご依頼ですか？」

対応してくれたのは金髪で蒼い瞳の美人で、見た目20台前後のエルフの女性だった

少し見とれてボーっとしてしまう

目が合った、あれ、向こうも顔が赤くなった、???、首を傾げてみる

「つつ!!?」

危うく悲鳴を上げるところだった

背後にいるアイから俺に対する殺気が膨れ上がった気がする

後ろを振り返る勇気がないので本題を切り出す

「えーと、会員登録しに来たんですが」

「え、ええ、ではこちらから幾つか質問するのでそれに答えてください」

と言われてそれから14問くらい、名前や年齢、種族、性別などに答えて、それをエルフの女性が書類に書いていく

「最後にお聞きしますが、ギルドでの目的は何ですか？」

「とりあえず冒険者になって世界中を見て回ろうかと思ってます」

「そうですかそれは良かった」

と言って嬉しそうに書き込んでいる

「????」

「では、適性試験を終わらせて本登録になりますがよろしいですか？」

「適性試験？」

「ええ、そうです」

と言って説明してくれた

まとめるとこんな感じ

ギルドは依頼主とギルド会員との仲介料で運営している。

本登録でもらえるギルドの会員カードは、城門がフリーパスで入場料はギルド負担らしい、さらに身分証明にも使える。

会員から犯罪者が出た場合ギルドの信用に係わるため、最初である程度適性を見るのと、ついでに実力も見極める。

そして、ギルド会員になったらそのメリットに見合うように個人ランクに見合ったランクの仕事を一ヶ月に最低3〜5の依頼をこなさないといけない。

ちなみにランクは上からS、A、B、C、D、E、Fの順らしい

「適性試験は冒険科Fランクの依頼で、試験官はわたし、ルリアが同行しますね」

「はい、ルリアさんですね、よろしくお願いします」

「はい、よろしくお願いします、ハルカ君」

「ちょっと待ってください!」

アイが後ろから俺を押しつける

「私も会員登録なんですけどコレと一緒に適性試験を受けることばできませんか?」

指をさすな指を、コレ扱いについては諦めているが

「えっ、ええ構いませんけどその場合、Eランクの依頼でのテストになりますかよろしいですか?」

「はい、それでいいです」

ルリアさんは雰囲気不満げな感じ、アイはやる気満々な感じだ

アイが手続きを終えた後、テストは明日ということになった

朝2つ目の鐘が鳴るころにギルドの北の入口に来てほしいとのこと

鐘は朝6時ごろから夕方の18時ごろまで2時間ごとに鳴らしているらしい

この後はベットを注文したり、軽く装備を整えたりして黒の部屋に帰った

今のところ俺の武器はスキルに入れ替えたと思ったので、早く入れ替える練習をしてその日は休むことにした、ついでなので使えそうなスキルも見つけておいた

明日が結構楽しみだ

適性試験

翌朝、俺たちは軽い朝食を終えて装備を整えたあと、待ち合わせ場所に転移する

ちなみにアイの装備は投擲用ナイフ2本、俺は黒革のコートのみだあとで俺が作るから装備は節約することになった

少しアイと雑談していると2つ目の鐘が鳴る前にルリアさんがやってきた

「あ、ルリアさん、おはようございます」

「今日は、よろしく願います」

「おはようございます、あの、一応聞くけれど、装備はそれだけの？」

「そうですね？」

「……今回のテスト依頼は、王都から西のククリの森に棲んでいるゴルボアと呼ばれる魔物の 肉を捕ってくることでよ？」

「はい、わかりました」

「では、西門に行きましょう」

2人とも簡単に言ったが、ククリの森までAランクのギルド員が最速で歩いて6時間はかかる、その上 途中で魔物に合う確率もある、だけど2人とも水も食料も持っていないし装備はアレだけ

ちなみにルリアの装備は厚手のローブに櫛の木で作った緑の宝石の付いた杖、食料と水を3日分だ

ルリアはこの時、もう不合格かなと思いつながらこの先のフォロで頭を悩ませていた

西門を出て少し歩いたところで、俺はアイに声をかける

「アイ」

「……わかりました」

名前を読んだだけで察してくれたらしい、アイから手を繋いで寄り添ってきた

アイは恥ずかしそうにソツポを向いて赤くなっている

「ルリアさんも」

「へ、わ、わわ、わたしも？」

唐突にイチヤイチヤし始めて、わたしにも同じことをしろってどういうことなの！？、と赤くなつて揺しているルリアに

「はい『転移』しますので」

「え、ええええええええええ！？『転移』できるの！！？」

「で、ででで、できますけど？」

最近は女性でも胸倉つかんで、問い詰めるのが流行つてんのか？
ルリアさんの身長は多分158？くらい、俺は172？くらい、
美人の上目づかいも悪くない

「つつつつ！！？」

ちよつつ、アイさん、足踏むのもわき腹つねるのもやめて

とアイに目で語つてみるが、冷たい視線しか返してくれない

その間にルリアは少し落ち着いたようだ

「ど、どうということなの、『転移』が使えるのは現在世界で2人だけ、それも2人ともSランクのギルド員なのよ！」

「そう言われても使えるもんは使えるしなあ」

「そうですね、あつという間に遠くに行ける便利な道具程度に思つてればいいです」

「いや、道具扱いはやめてほしいんだけど」

「じゃあペットです」

「………もう、いいや、ソレで、………はあ」

「………もしかして、ハルカ君の目の色と何か関係あるの？魔眼持ちなの？」

悲しいことに今のアイとのやり取りで落ち着いたようだ

「目の色？魔眼？」

そういえば、まだ自分の容姿はちゃんと確認していない、髪の毛は視界に入るから黒だと分かっているが目の色や顔は自覚していない
ルリアさんを待たせて少し離れてアイに聞いてみる

すると俺の顔は良くもなく悪くもなく、10人中5人はかつこい
いと言ってくれるらしい（微妙だな）、目の色は引き込まれそうな
深い紫色をしていて、かなり珍しいらしいことを教えてくれた

「なんでそんな怪しい色なんだろうな？」

「さあ？」

2人で顔を合わせて首を傾げる

とりあえずルリアさんのところに戻って、関係ないらしいことを
伝えて今度こそ『千里眼』で見て『転移』した

森の手前に転移して、この場所がククリの森が確認した後ゴルボ
アの特徴を聞く、大きさは最大でクマくらい、見た目猪っぽい奴に
金色に反射する鬣が生えてる魔獣で、鬣の反射具合で鮮度が分かる
魔物と魔獣の違いは食べられるかどうかで決まっていて、共通す
るのは体内に魔石と呼ばれる核があり、核が大きい魔物は種類を
問わず魔法を使う

核は魔法系スキルの増幅媒体になるが、握り拳位大きくなければ
売れないらしい

「そういえば、ルリアさんはギルド職員じゃないんですか？」

「ええ、たまたまギルドの受付の依頼をうけてただけよ。本業はB
ランクのギルド員よ」

「へえ、そういった依頼もあるんですね」

「余裕ができればギルドからの依頼は受けられるなら受けた方がい
いわよ、報酬は少ないけどいろいろ優遇してくれる事があるわ」

「たとえば？」

「そうねえ、職人系ギルド員が持ち込んだ質の良い装備や回復薬の
優先買取とか割引ね、他にも新しいダンジョン情報とか、おいしい

仕事を紹介してくれたりいろいろあるわ」

「ふむふむ、とても参考になります、ところで昨日と口調が違いますん？」

「フフフ、そりゃあ変わるわよ、昨日は基本的にお客への対応で今日は同業者とパーティを組んでの仕 事なんだしね」

「そういうもんですか」

「ギルドでの接客は丁寧に愛想よくやらないといろいろ面倒なのよ、どうやらナンパやクレームをつけてくる奴らがいるらしい」

俺とアイに接客の仕事は無理そうだ、だが他のギルド系依頼は後で確認しておこう

「話がそれています、早く終わらせて早く帰りましょう」

「それもそうか」

アイと話し合って前衛と後衛は臨機応変に変えていくことにした

森に入っ た後は俺が先導しながら『探知』『感知』『察知』『スキルを使って獲物を確認し、周囲を警戒しながらワザと遠回りをしながら進んだ

先ほどの『転移』で騒がれたのでルリアさんにスキルがばれないように配慮した結果だ

自業自得とはいえ中々めんどくさかった

そしてやっとゴルボアのところにたどり着いたんだが……………

「なあ、あれどうしたらいいと思う？」

「そうですね、ハル力を放り込むのはどうでしょうか？」

「いや、そうじゃなくて男と男の勝負に手を出すのはどうかなと」

ゴルボアは3頭いた、どうやらメス？の取り合いをして2頭は決闘？をしているようなのだ

「わたしは試験官だから2人の命に危険がない限り手は貸さないわよ」

「そりゃそうでしょうね」

ちなみに今は木の陰に隠れながらこそ話している

「ならやぱり、ハル力を放り込んで混乱してる間に私がメスの方を仕留めます」

「オニか、せめて負けそうな方のオスか優勢の方のオスにしとけよ」
「ハル力こそよく見てください、オスの方はどちらも傷ついて鬣の反射具合がメスよりも劣っています」

「あゝ鮮度かあ、でもどのみち『転移』で戻るんだしあれぐらいなら許容範囲内じゃないか？」

「夕食の妥協は私が許しません」

「今日の夕飯がいつの間にか決まってる！」

「昨日は簡単すぎてイマイチでした」

「あらあら、可愛い恋人のために少しは甲斐性を持った方がいいわよ、ハル力君」

「いや、アイは恋人じゃないですよ」

「そうなの？」

「そうです、というわけで逝ってきてください」

いつの間にか背後にまわってきたアイに襟首を掴まれてブン投げられた

「それは字が違つたろおおおお！！？」

突っ込みながら余裕をもって『飛行』で体勢を立て直して2頭のオスのゴルボアの間に着地する

「くっそ、面倒事とかアイを盾にしようと思ってたのに向こうも同じことを考えていたのか？」

ゴルボアが混乱して攻撃してこないのをいいことに外道なことを小さく呟いてみる

「ブホオオオオオオ」

どうやらゴルボア2匹は俺を先に排除する気になったらしい
スキルは『徒手格闘』『浸透剋』『寸動』『化勁』『瞬足』『気
体術』『見切り』『察知』『感知』『HP自動回復』に着地してす
ぐ変更した

昨日確認した時に分かったが、『瞬足』は速い移動と足技が速く
なる効果があり、『気体術』はHPが徐々に減っていくが身体能力
が倍になるスキルだ

ゴルボアは2頭とも真っ直ぐに俺に向かってくる

ギリギリを見極めて少し大きめに1歩後ろに下がる

猪突猛進の勢いで2頭とも正面衝突でひるんだところに、2匹の
頭を踵で死なない程度に手加減して攻撃した

2頭とも倒れたが、1頭はまだ意識があるようだったのもう一
度同じ所をさつきより軽く攻撃して気絶させた

アイの方を見てみると向こうも終わっているようだ

「アイ、お疲れ」

アイに声をかけながら近寄っていく

「ご苦労様です、ハルカ」

「知ってて言ってるよな？ 苦労押し付けられた気はしてるからいい
けど」

「冗談です、ハルカもお疲れ様です」

「お疲れ様、2人とも仲が良いのか悪いのかわからないわね」

ルリアさんが苦笑しながら近くに歩いてくる

「でも恋人じゃないってのは本当みたいね？」

「それは後にしてください、早く帰って本登録と夕食の確保です」

ルリアさんは嬉しそうにアイを見ながら、アイは苦虫を噛み潰し
たような顔をしてソッポを向きながら答えている

「アイって結構食い意地張ってたんだな？」

「そんな事より早く『転移』してください！」

「そうね、わたしもそれでいいわよ？」

アイは右手でゴルフアを寄せながら左手で俺の右手を掴み寄せ、
ルリアさんは俺の左手に抱きついて腕を組んできた

「・・・・・・・・え〜と？」

アイさん握力強いです、あと右足踏んでグリグリするのやめてほしい

ルリアさんは左肘に胸が当たってます、意外と着痩せするんですね？

・・・・・・・・じゃなくて、何だろこの天国地獄状態、顔が赤くなったり青くなったり大忙しだよ！！？

「・・・・・・・・早く『転移』してください！」

「わたしはもう少しこのままでもいいわよ？」

「・・・・・・・・はあ」

ため息を吐きながら『転移』した

本登録

直接ギルド前に『転移』したらルリアさんに怒られた、門から外に出た場合は門から入って来ないといけないらしい

仕方なくもう一度西門の近くに転移してゴルボアは俺が担いで王都に入る、適性試験中は入場料を払わなくていいのは幸運^{ラッキー}だった

ギルドに着いて完了の報告をし、ゴルボアを引き渡した後夕食のために依頼主の飲食店を聞いて、ギルド内で手続きするための個室に案内してもらった

「とりあえず適性試験は合格よ、このカードの魔方陣の上に血を垂らして」

ルリアさんに真ん中に魔方陣と俺たちの名前が書かれた、金属のカードを渡され、アイからナイフを借りて親指を少し切って血を垂らすと、魔方陣が回転しながら消えてカードに名前と会員ナンバーとランクが表示された

「それで本登録は終了よ。」

そのカードは本人が触れているときか本人が死んだときのみ情報が表示されるわ」

「本人が死んだとき？」

「ええ、死んだ場合の身元確認のためにね、ランクが消えて死亡の表示に切り替わるわ」

「へえー」

依頼で死んだ場合とかギルド員の家族のための形見とかにするのかね？

「あと、このカードは連絡にも使えるわ」

「そう何ですか？」

「ええ、ハルカ君カードをこちらに」

と言いながらルリアさんも自分のカードを取り出して俺のカードに触れ合わせる

「これで、わたしとハルカ君はお互いに連絡を取り合えるわ。

カードに触れて指を下にスライドさせたら、わたしの名前に触れて10秒ほど待つてみて」

タッチパネルみたいだなと思いながら下にスライドさせると、ルリアさんの名前が表示されたので触れてみる

すると目の前でルリアさんのカードが光の帯を放出した、そしてその帯はそのままルリアさんの周りを輪っかになって漂い始めた
「こうやって連絡がきたことを教えてくれるのよ、わたしがハルカ君の名前に触れると会話できるわ」

そう言ってルリアさんが指をスライドさせると、漂っていた光の帯がルリアさんのカードに吸い込まれ、そのあと俺の名前が光っていた

「このまま連絡に応じないことも可能よ、その場合は2分くらい連絡してきた相手の名前が光っているわね。

あと登録できるのは10人までで、これが一番大事なんだけど使う人はお互い魔力(MP)を消費するわ」

「一番大事ですか？」

「距離と会話する時間に比例して魔力(MP)消費が増えるのよ、だから普段使っるのは連絡相手と同じ町にいる時に長くても1分程度の会話が精々ね」

「なるほど、複数と同時に連絡取れたりします？」

「それは無理ね。」

ただ今みたいな場合は傍にいるアイちゃんがハルカ君とわたしの会話に入ってくることはできるわ」

「それで登録した相手の名前を消す場合はどうすればいいですか？」
さっきまで沈黙していたアイが質問する

「あら、アイちゃんとはまだ交換してないけど？」

「他意はありませんが？」

気のせいかな2人の間に火花が散ったような？

「……………まあいいわ、連絡するときみたいに下にスラ

イドさせた後、2本指で消したい人の名前に触れて1本の指は触れたまま、もう1本の指をスライドさせると消えるわ。

それで自分と相手のお互いの名前が消えるわね」

「へえ、使い方によつてはかなり便利ですね」

「そうかしら？」

「最初から待ち合わせ場所を決めておいて、それで連絡するんですよ」

「なるほど、連絡を受けた相手は応じないで、そのまま待ち合わせ場所に向かうわけですね」

「待ち合わせ場所に行けない場合は、2分待つて連絡を折り返せばいいですし」

「へえ、そういう使い方もあったのね。」

確かにそれだと魔力消費が殆んどないわね」

ルリアさんは感心するように、頷いて俺とアイのやり取りを聞いていた

「ルリアさんはそういう使い方してる人とか見たことないですか？俺じゃなくても誰か思いついてそうだけだな？」

「あの、言い難いんだけど、わたしパーティってちゃんと組んだことないのよ」

「へ？」

実力はランクしか知らないが、美人さんて引く手数多じゃないのかな？

「実は、以前、討伐依頼でパーティに誘われてついでに行ったんだけど、わたしが攻撃に加わるといつの間にかパーティを組んだ人たちが居なくなつてて、そのあとギルドに帰ってきて顔を合わせると、みんな一目散に逃げていくのよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・コメントし辛いです」

アイが突っ込んだ！

というか何が遭ったんだ！？

「本当に何でかしらね？毎回そうなのよね」

「……………毎回同じなんだ……」

ルリアさんとパーティ組む時は絶対攻撃させないか、俺とアイは後ろに控えていよう

アイも同じことを思ったのか目があつたのでお互い頷いて考えを共有する

そのあとの説明では、ギルドで受けた依頼を失敗、もしくは取り消し（キャンセル）した場合は注意と罰金、最悪ギルドの利用禁止があることや、ギルド員が犯罪を犯した場合は賞金首として討伐、もしくは捕獲の義務があることを教えてくれた

ギルドカードの死亡認識は討伐した場合の身元確認に使われるのが元々の目的らしい

「でも、犯罪者になつた時点でカードを捨てる人いますよね？」

「それは無理なのよ」

「何故ですか？」

「見た方が早いわ」

そう言つてルリアさんは近くの開いた窓に歩いて行つて、手に持つた俺のギルドカードを外に向けて投げた

「……………なぜ俺の周りの女性はこういう人しかいないのだろうか？」

まだアイとルリアさんしか知り合つてないけど、と思つたら目の前に俺のカードが落ちてきた

「え？」

「『転移』ですか？」

「いえ、正確には違ふらしいけど……まあ、似たようなものよ」「確かにこれなら討伐したとき、必ずカードを回収できますね」

自分のカードを手にとって確認する

「あと、近くに犯罪を犯したギルド員がいると振動して教えてくれるわ」

「へえ、どうやって判別するんだろう？このカード結構多機能です

ね」

「そうね、でもギルドはカード機能の詳細は秘匿していて、わたしも知ってることは今言ったのがすべてよ」

「ふむ」

それを売りにしているのかな？とりあえず今はまだ知らないことが多すぎる、犯罪を犯してお尋ね者にならない様に気を付けよう

説明を終えて軽く談笑して外に出たときは昼を少し過ぎていたため、ルリアさんと別れて昼食を食べに行くことにした

「それじゃあハルカ君、何かおいしい仕事があったら呼ぶわね。」

あと、困ったことや手を借りたいことがあったら、遠慮なくわたしに相談しにいらっしやい」

ルリアさんは笑顔で手を振ってくれた

「はい、その時はよろしくお願いします」

攻撃役のいない仕事じゃないと呼ぶ気にならないと思うけど

「では、また何時か」

アイはソツポを向きながら言った

これは、そのうちルリアさんにもデレるだろうか？

昼食を食べた後またギルドに戻って手ごろな依頼がないか確認してみる

ちなみに昼食はバーベキューで焼くような肉と野菜の串焼きとタコスを食べた

「なあアイ、何か良い依頼あるか？」

依頼が書かれた紙が貼られている掲示板に目を通しながらアイに聞いてみる

「そうですね、気になるのは【スライムドラゴンの討伐を求む】ですね」

「・・・・・・・・何それ？」

強いのか弱いのか判らないのが確かに気になるが

「此処から東に向かつて一番近い村からの依頼らしいです。

好奇心が掻られますしこれにしましょう」

「できれば、簡単な搾取系とかから手を付けたかったんだけど？」

「何言ってるんですか？私が折れると思ってるんですか？」

「・・・・・・・・好奇心は猫を殺すって言葉は知ってる？」

「私には立派な盾がハルカいますし問題ないでしょう」

「ルビがおかしい！！？ゴルボアの時もやっぱり狙ってやったのか

！！」

「あれは、ハルカとルリ・・・ア・・・いえ、偶々です」

「・・・・・・・・」

とりあえずジト目で見つめてみる

「・・・・・・・・仕方がありません、今日は夕食の事もありますし簡単なものでいいです。

そのかわり、明日の朝に来たときにまだあったらこれを受けます」

「はぁ・・・もういいやソレで」

アイから譲歩を奪うことができただけ1歩前進かな？それとも夕食に釣られただけか・・・

結局その日はギルド系列の店と依頼の見物をした後、そのまま早めの夕食を食べて、明日に備えて寝ることにした

明日、スライムドラゴンの依頼が無くなっていることを切に願う

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6539x/>

trans the story（仮）

2011年10月31日20時05分発行